慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴木榮太郎論 : 「辺境」の位座からみた社会学原理の構築
Sub Title	
Author	阿久津, 昌三(Akutsu, Shozo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2005
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.10 (2005.) ,p.67- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 都市人類学の再構築
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鈴木榮太郎論

「辺境」の位座からみた社会学原理の構築

阿久津　昌三

1．はじめに

鈴木榮太郎は、『日本農村社会学原理』『都市社会学原理』『国民社会学原理(遺稿)』という三つの社会学原理を構築しようとしたことは周知の事実である。鈴木榮太郎の社会学原理は、社会学では「農村」「都市」「国民」というテーマ別に、農村社会学、都市社会学、政治社会学という領域社会学によって学説史的に検討されるのが一般的である。しかしながら、鈴木榮太郎が「農村」「都市」「国民」の三層構造において総合的な社会学理論の体系化を図ろうとしたことは論じられていない。

鈴木榮太郎は、1947(昭和22)年に北海道大学法文学部教授に就任するが、その年に行った「社会学概論」の講義内容が『社会学概論(遺稿)』(北海道大学法文学部社会学講義集録)として残されている。これは、斉藤兵市が講義を筆記して、笹森秀雄が1981年に20部コピーしたものである。この章立ては、第1章「緒論」、第2章「社会学の対象」、第3章「社会科学と社会学」、第4章「社会本質論の問題性」、第5章「社会統一体の成立」(第1節「序説」、第2節「結合成立の条件」、第3節「社会的結合」、第4節「結合の組織化の過程」、第5節「行動雛型と社会意識」)からなる。これが出版されたならば、高田保馬の『社会学概論』(岩波書店、初版 1922年、改訂版 1950年)、戸田貞三の『社会学概論』(有斐閣、1952年)とともに、『社会学概論』の三部作が世に出たことになる。

高田保馬は鈴木榮太郎よりも11歳年長、戸田貞三は鈴木よりも7歳年長であるが、鈴木榮太郎は『日本農村社会学原理』の「序」で「戸田先生は日本社会の実證的研究者として何人も其権威を認むるところであるが、私は數年來先生の驥尾に附し調査研究を共にするの幸を得て居る。私は高田保馬先生には直接に師事するの機會は得なかつたが、著書を通じて私を教えた学者として高田先生の如く私を啓発するところ多き人は外にはない」(時潮社、1940年)と述べている。鈴木榮太郎が、高田保馬、戸田貞三という同時代の社会学者の影響を受けたことは事実であろう。しかし、本稿は、高田保馬、戸田貞三、鈴木榮太郎の『社会学概論』を比較検討しようとするものではない。

本稿では、三つの社会学原理がどのように構築されたのかを鈴木榮太郎の足跡をたどることによって検討することが課題である。つまり、鈴木がたどってきた足跡―壱岐、対馬、東京、京都、岐阜、京城、札幌、東京という場所性―中心と周縁の関係のなかで―鈴木榮太郎の社会

学原理がどのように構築されるのかを鈴木をとりまく人脈のなかで検討することが課題である。

2．鈴木榮太郎の学譜

鈴木榮太郎は、1894(明治 27)年に、長崎県壱岐郡郷ノ浦町に生まれた[1]。対馬厳原中学、第一高等学校を卒業後に、東京帝国大学文学部に入学する。在学中には、建部遯吾が主宰する『日本社会学院年報』に「国際連盟に対する北米合衆国の真意」「米国戦後の軍隊」「産業的温情の実験各種」（第７年、1920 年)、「社会実測社会学」「匈牙利の近情」「基督教と産業」「国際主義に対する心理学的側面」(第８年、1921 年)を発表している[2](第Ⅰ期「東京帝国大学の時期」)。鈴木榮太郎は「日本のコント」（「トンゴ」）を自称していた建部遯吾と反りがあわなくなり、卒業を目前にして社会学から倫理学に移籍する。

1922(大正 11)年に、京都帝国大学大学院(社会学専攻)に入学し、米田庄太郎に師事する。蔵内数太、田辺寿利、秋葉隆たちと発足した東京社会学研究会[3]では、英国社会学の理論に関心をしめして、1924(大正 13)年に、Ｊ・Ｓ・ミルの学説について研究発表を行っている。この年に、ホブハウスの『国家の形而上学的学説』(不及社)を翻訳している(第Ⅱ期「京都帝国大学の時期」)。

1925(大正 14)年に、岐阜高等農林学校(現在の岐阜大学農学部)教授に就任する。倫理学と独逸語を教えることになる。これは文部省の督学官であった山内雄太郎の推薦によるものであった[4]。米田庄太郎の餞の言葉にしたがって鈴木は農村社会学の研究に励むことになる。英米の農村社会学を精力的に読みながら『農村社会調査法』(刀江書院、1932 年)、『農村社会学史』(刀江書院、1933 年)をまとめている。これらの研究成果は『日本農村社会学原理』(時潮社、1940 年)として体系化される。

鈴木榮太郎には、社会学関係の論攷以外にも、木曽川や長良川などの流域調査にもとづいたものや、民族学や民俗学の学問領域から執筆された論攷がある。特に、後者については「郡上郡粥川部落における鰻に関する俗信とトーテム」（『各務時報』第 37 号、1929 年)、「峠の社会的重要性と美濃飛騨の峠」（『雷鳥』第２号、1930 年)、「東北ところどころ」（『郷土科学』第 15 号～第 17 号、1932 年)、「水無ケ原縁起」(岐阜高農創立 10 周年記念『各務時報』、1934 年)、「飲食を強いる慣習のこと」（『読売新聞』1935 年 1 月 18 日)、「屋敷神考」（『民族学研究』第１巻第２号、1935 年)、「血縁に関する二つの方面」（東京社会学会編『社会学研究』１輯、1935 年)、「農村に於ける通婚地域に就いて」（『(年報)社会学』第３輯、1935 年)、「郷土史家の不安」(『読売新聞』1936 年 1 月 15 日)、「オジ村の話」(『大阪朝日新聞』1937 年 1 月 3 日)、「氏子集団の研究」（『(年報)　社会学』第 5 輯秋季号、1938 年)、「農村における労力交換の慣習」(『富民』第 11 巻１～２号、1939 年)、「社会人類学上としてのエンブリー氏の『スエ村』と日本農村社会学」（『民族学研究』第６巻第３号、1940 年)、「宮座について」（『帝国大学新聞』第 872 号、1941 年 10 月)、「美濃の山村」（『雷鳥』第３号、1941 年)などである。柳田民俗学ときわめて接近していたことがわかる。

鈴木榮太郎は、日本民俗学の創始者の柳田國男との出会いを次のように語っている。

「柳田先生の御葬儀の時、青山斎場の休憩室で有賀喜左衛門君、喜多野精一君、大藤時彦君、関敬吾君等と一つのテーブルを囲んで先生の事など話していた時、〈あんたは先生には何時頃から近づいて来たのか〉と云ったのは有賀君であったと思う。〈たしか四谷あたりの古い大きな侍屋敷に住んでいられた頃伺ったことを記憶している〉と云ったら、〈あの頃から知っている人はもうそんなに多くないだろう〉と云った」[5]。

鈴木榮太郎は、岐阜高等農林学校教授に就任した後に、草葉栄喜の慫慂と指導、奥田彧、岡村精次との交流によって農村社会学を始めるとともに、柳田國男を中心とする民俗学に接近している。欧米の農村社会学の理論を学ぶとともに社会調査を実施しながら農村社会学を体系化していった。また、エンブリーの『スエ村』の書評のなかで「社会人類学は私らが日本農村社会学の名において考えているものときわめて近縁なものである」[6]と述べている。これは、鈴木榮太郎と社会人類学との出会いとも解釈することができる(第Ⅲ期「岐阜高等農林学校の時期」)。

鈴木榮太郎は、1942(昭和17)年に京城帝国大学助教授として朝鮮に赴任する。この経緯については、蔵内数太が「若き時代の鈴木榮太郎」のなかで次のように語っている。

「京城の社会学の教授は秋葉隆君であったが、夏の或る日、当時福岡にいた私の宅に秋葉君がやって来て、このたび社会学の助教授が採用出来ることになったので、人選について話を聞いて欲しいという。話をしている間に数名の名前が上ったが、彼はつぎに岐阜に立ち寄って鈴木君の意見を聞くのだといって出て行った。其後帰任の途中であったか、また私のところに来ていうには、岐阜で鈴木君と話していると、突然同君より〈秋葉さん私を採用しませんか〉と言い出したので、余り話が旨すぎて一寸不審な気持ちがしたが、ほんとうの意向であり、そこで願ってもない結果になったという。秋葉君にしてみれば当時すでに農村社会学の大家であった鈴木君を京城まで一助教授として招くことは不可能であるとの前提で話をしていたので、驚くやら嬉しいやらで、即座に鈴木君を迎えることにしたというのである。形は自薦であるが、そのときの鈴木君の心境も私には分かりすぎる位よく分った。これを伝えるときの秋葉君の得意な口調は、福岡南郊の夏のさわやかな風とともに、いまも私の脳裡に鮮かによみがえる」[7]。

鈴木榮太郎の「心境」がいかなるものであったのかは推測になってしまうので述べないが、京城帝国大学では「朝鮮農村社会瞥見記」(『民族学研究』第1巻第1号、1943年)、「朝鮮の農村社会集団について」(朝鮮総督府『調査月報』第14巻、第9、11、12号、1943年)、「朝鮮の農村」(東亜社会研究会編『東亜社会研究』第1輯、1943年)、「湖南農村調査野帳抜書」(『朝

鮮』353号、1944年10月)、『朝鮮農村社会踏査記』(大阪屋号書店、1944年)などをまとめている。著作集では『朝鮮農村社会の研究』という題名で収録されている。鈴木榮太郎は、「道」「郡」「面」「里」「洞」の行政地域区分の最後の最小単位である「洞」について人類学的な意味での機能主義的な視点から次のように分析している。

「山神堂を共同維持崇敬する祭祀体を組織している事、自治的機関として洞中契を組織している事、共同奉仕作業や洞宴がある事、共同労働組織としてツレを組織している事、洞に総有の財産がある事等によって、少なくとも屯山洞は一つの村落共同体を構成している」(『朝鮮農村社会瞥見記』)。

朝鮮総督府の行政再編成によって、郡も面も旧来のものが統合再編成のなかで拡大されて、いくつかの旧洞を含んだ里が総督府にとって行政単位としてきわめて重要であり、日本式の「部落」という呼称で呼ばれていることを発見していることは、鈴木榮太郎が「自然村」の概念を再認識したという意味でも重要である。以下に引用するように、まさに朝鮮は、シカゴ学派にとって都市が「実験室」であったように、鈴木榮太郎にとって農村は「研究室」であった。

「この4月から朝鮮に移り住む事になった時、私はこれから自分の直接の研究事項をあれやこれやと考えたのであるが、それらのいずれの問題に対しても朝鮮の農村はもっとも多く私の研究材料を蔵しているところであると思った。私は必ずしも農村社会学というような形で私のこれからの研究を統一しようと思うのではないのであるけれども、やはり農村が私にはこれからでももっとも親しむべき研究室であるようである」(『朝鮮農村社会瞥見記』)。

鈴木榮太郎は、1945(昭和20)年11月に敗戦で京城を引揚げて帰った時に、リュックサックのなかには「特別の本2冊の外に数冊のノート(大正14年以来書込んでいる「旅行日誌」3冊と著書および論文の目録1冊)」[8]をもっただけで蔵書などの資料をすべて失った。鈴木は、京城から引揚げ後に伊豆の山村に生活する日々を過ごす。1946(昭和21)年に東京帝国大学より文学博士の学位を授与される。その年にＧＨＱの民間情報教育部(ＣＩＥ)の世論及び社会調査部に勤務する。戦前から調査経験のある社会学、民俗学、人類学、地理学等の研究者がＣＩＥに結衆したこと(喜多野精一、小山隆、関敬吾、竹内利美など)、また、アメリカからの新しい学問―特に、都市社会学が直輸入されたことは重要である(第Ⅳ期「京城帝国大学/ＣＩＥの時期」)。

鈴木榮太郎は、1947(昭和22)年に北海道大学法文学部教授に就任する。「都市社会学」の特別講義を開講するのは1951(昭和26)年である。この時期には「『生活白書』の構想」(『総合開発』「北海道総合開発委員会事務局報」1952年)、『北海道における社会構造の研究―社会地区の設定』(北海道総合開発委員会事務局、1953年)、「都市社会調査方法論序説」(『都市問題』第45巻第5号、1954年)、「北海道だより」(村落社会研究会編『村落研究の成果と課題』、1954

年)、「聚落社会の概念及び都市の概念」(『北海道大学文学部紀要』第6号、1957 年)、「都市社会調査法ノート」(笹森秀雄と共著(遺稿)などを発表している。最終的に『都市社会学原理』(1957 年)、『都市社会学原理　増補版』(1965 年)として体系化される(第Ⅴ期「北海道大学文学部の時期」)。さらに、北海道大学文学部を定年退職前後から「国民社会学原理」関係の論文を準備していたことはよく知られている(第Ⅵ期「東洋大学の時期」)。

3．三つの社会学原理—「農村」「都市」「国民」

社会学関係の論評では、鈴木榮太郎の『日本農村社会学原理』『都市社会学原理』『国民社会学原理ノート』が切り離されて論じられることが多い。鈴木榮太郎の学譜でも分析したように、『日本農村社会学原理』は岐阜高等農林学校の時代に体系化されたものである。京城帝国大学法文学部の秋葉隆教授の招聘によって朝鮮半島の農村調査が実施され『朝鮮村落社会の研究』がまとめられる。また、北海道大学文学部の時代には『都市社会学原理』が体系化される。どちらのモノグラフも「農村」と「都市」という限定詞を冠した「社会学原理」であるが、「日本」という地域限定詞を冠しているかどうかに決定的な違いがある。しかし、朝鮮半島を調査することで、日本列島を越えた『農村社会学原理』を希求したものと読みとることもできるだろう。あるいは、社会学、民俗学、民族学という超学問的な領域を希求したともいえるだろうか。

富永健一は、「鈴木栄太郎の社会学理論」という論文のなかで、『日本農村社会学原理』と『都市社会学原理』という二つの主著をとりあげて、「原理」という一般理論を指向する強い語彙を表題にもちいていることに着目している(草稿だけに終わった第三の主著も『国民社会学原理』である。著作集では『国民社会学原理ノート』)。富永は、鈴木榮太郎の学問が「普遍的認識に指向した命題定立的(命題のシステムがすなわち理論であるから『命題定立的』と『理論的』は同義)な性格のものである」と述べている。

また、富永は、これらの二つの主著をとりあげて、「農村」と「都市」という領域指定がなされているとともに、『日本農村社会学原理』には「日本」という地域的限定がなされていることに着目している。鈴木榮太郎が「農村」「都市」「国民」という領域指定を行うことで、「具体的に調査し得るもの」に限定して、有賀喜左衛門の石神村調査のモノグラフとは異なり、異なった地域からとらえた数個の農村や都市を調査対象として、理念型としての農村と都市に関するモノグラフを創造したと解釈している[9)]。さらに、地域的限定については、鈴木榮太郎が『日本農村社会学原理』『都市社会学原理』の冒頭のなかで、次のように述べている。

「日本農村社会学は、社会学上の研究ではあるが、それが日本だけに関するという意味において第一の限定があり、農村だけに関するという意味で第二の限定があり、また特に主として現時に中心をおいているという意味において第三の限定をしている。かくて日本農村社会学は、現時の日本農村における社会的事実に関する社会学的研究であるが、それは現時の日本の農村生活の社会的側面の全般的・基礎的・組織的研究であるという意味において体系

的である」（『日本農村社会学原理』）。

「私の都市社会学の研究が、国の内外の先輩諸学者に学ぶところが相当に多かった事は当然であるけれども、しかし私の研究に最も力となったのは、私の教室の助手と学生達であった。私のこの研究は、全くそれらの諸君との協力によって完成したものである。私の二人の助手笹森秀雄君と富川盛道君が、私の手となり足となり、私自身が試みるよりももっと活発に正確に調査してくれなかったら、この研究はとても成就できなかったものである」（『都市社会学原理』）。

鈴木榮太郎の学問は、「農村」「都市」「国民」という領域を設定して社会学原理を構築しようとした。特に、国民社会学原理の構築は、第Ⅰ期「東京帝国大学の時期」から第Ⅴ期「北海道大学文学部の時期」という循環のなかで、第Ⅰ期「東京帝国大学の時期」と第Ⅱ期「京都帝国大学の時期」の原点にもどったと見ることができる。その最も影響をあたえた同時代の社会学者には高田保馬がいることは最初にとりあげたところであるが、それだけではないだろう。

4．秋葉隆と泉靖一—京城帝国大学の学問

坪井幸生は、1936（昭和 11）年に京城帝国大学法文学部法科を卒業しているが、当時の京城帝国大学には「文科には哲学科の安倍能成、宮本和吉、上野直昭、支那文学の藤塚隣、辛島尭、国文学科の高木市之助、麻生磯次、時枝誠記　（中略）　法科でも法理学（法哲学）の尾高朝雄、憲法の清宮四郎、ローマ法の船田享二、経済学の鈴木武雄などの錚々たる教授陣がいた」と回想している（『ある朝鮮総督府警察官僚の回想』草思社、2004 年）。この外にも、京城帝国大学には鈴木榮太郎を招聘することになる秋葉隆がいた。そして、『朝鮮巫俗の研究』の秋葉との共著者でもある宗教学の赤松智城もいた。

秋葉隆は、1921（大正 10）年に東京帝国大学文学部本科（社会学）を卒業している[10]。翌年に東京社会学研究会を蔵内数太、田辺寿利と発足させたことはすでに述べた。1924（大正 13）年に大学院を退学して、発足間もない京城帝国大学予科講師に就任する。同年より社会学と民族学を学ぶために、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカに留学した。特に、ロンドン大学に留学中にマリノフスキーの影響を受けた。秋葉隆の末弟子にあたる村武精一は、秋葉隆の炉辺談議を次のように述べている。

「先生がヨーロッパに留学されたとき（大正 13 年から大正 15 年にかけて）、ロンドンのブリティッシュ・ミュージアムでしばしば調べものをされた先生は、博物館内の研究者用特別室でいつも早くから遅くまで熱心に読書に励んでいるひとりの学者を発見した。いつ訪ねても同じ場所、同じ姿勢、同じ雰囲気であった。その人がＢ・マリノフスキー教授であった。先生がマリノフスキー教授に直接問われてみると、トロブリアンド諸島において蒐集した調

査資料の分析のために、ひたすらいろいろな分野、周辺諸科学の理論を学び検討しているとのことであった」[11]。

マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』[12]が出版されたのが1922年であるから、秋葉隆がロンドン大学に行ったのはその直後ということになる。ここでは、秋葉隆の業績について記述することが趣旨ではない。京城帝国大学には鈴木榮太郎とも調査をすることになる泉靖一という文化人類学徒が誕生することになる意味である。あるいは、京城帝国大学という植民地に設置された帝国大学の意味である。京城帝国大学予科に入学した泉靖一は竹中要教授たちと予科スキー山岳会を設立させるが、泉靖一は「孤立と後進性の悲哀」(梅棹忠夫)[13]を味わうことになる。それは、1934(昭和 9)年の終わりから翌年のはじめにかけての、今西錦司博士を隊長とする、京都帝国大学の冬期白頭山遠征隊の来訪である。つまり、内地の学生山岳連盟の水準と比較した京城帝国大学の後進性である。さらに、これは泉たちの済州島での遭難が決定的なものとなった。

「私はただぼんやりと国文学科に席をおいて、山にばかり登っていたが、それからさき、まえのような立場でおこなえる学問をしたい(中略)ちょうどそのころ、京城帝国大学の宗教学・社会学研究室の赤松智城・秋葉隆の両先生が、朝鮮のシャーマニズム巫俗の実態調査による研究をおこなっていた(中略)私は秋葉先生を訪ねて、社会学を専攻したいと、お願いしてみた。京城帝国大学の法文学部では、まだそのころ社会学は独立の学科ではなく、倫理学科のうちの 1 コースにすぎなかった。開講して 10 年もたっていたが、専攻の学生は一人もいなかった。秋葉先生は、私がたまたま済州島で遭難したので、済州島の巫俗に興味をもって、社会学を専攻しようとしているのではないかと、思われたようだ。それもあたりまえのことで、事実はたしかに先生の心配にちかかったのである。

先生は、マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』を貸してくださって、〈こんなのことを一生やるのですよ。だが、就職口はほとんどないでしょう。いいですか?〉とつけ加えられた。私は、分厚い英語の本をもって、家に帰った。おもてにでると、狭い京城の日本人社会のことだから、済州島での遭難については、だれでも知っていた。そして、まるで心中のかたわれをみるような視線が、私の背後を迫った。私は家に閉じこもって、この本を読みふけったが、西太平洋の原住民の生活に、あやしいまでにひきつけられた。もし、私におなじような機会があたえられたら、どうしよう――――そんな幻想にもとらわれた。済州島の人びとの生活を、こんな角度から描きだすことができれば、素晴らしいにちがいない。それに、野外調査を方法とする学問は、文献にひきずりまわされる学問にくらべると、性に合っているようだ。山登りと、両立するからである。

秋葉先生をふたたびお訪ねして、私は素直に自分の考えを述べた。先生は、10 年ぶりでようやく弟子ができそうですねと、よろこんで、社会学を専攻することを許してくださった」

[14]。

1938(昭和 13)年に「済州島—その社会人類学的研究」という卒業論文をまとめている。泉靖一は、卒業論文の審査が終わり、京城帝国大学法文学部の助手に就職する。当時、助手から講師や助教授に昇進した京城帝国大学の卒業生はいなかったが、泉靖一は京城帝国大学蒙彊学術調査隊に参加する(当時の山岳部長は尾高朝雄教授)。1939 年から 41 年まで、軍隊に入隊し、本籍のある北海道の旭川と満州を往復することが多くなり、スキー部隊の教官となり、陸軍少尉となっている。1941(昭和 16)年 5 月、大連で井関貴美子と結婚、旭川に住むが、10 月に除隊して京城に帰り、京城帝国大学理工学部助手に復職する[15]。泉靖一は「大学は社会の変化に敏感ではなく、万事テンポがずれていたし、こんにちもなおそのほうがいいと考えているひともすくなくない」と回想している。日本内地では大政翼賛会が組織されるようになったが、朝鮮ではそれをモデルとして国民総力連盟が組織されるようになった。このような時代に鈴木榮太郎も大学版の総力連盟を組織して秋葉隆、泉靖一とともに調査研究に従事することになる。

「私は(こちらに来て日も浅く家庭や大学での生活も)まだそんな落ちつきが充分にできていないうちに第 1 回目の調査に出かける必要に迫られた。それは城大の総力連盟研究班でこの夏休みに学生 40 名が参加して南部朝鮮群山郊外の不二農場附近の農村生活を、医学や法律学や経済学や社会学の方面から調査研究する事になり、その社会学的調査研究の予備調査に秋葉教授と私とそれに研究班のマネージャー格である学生主事補の泉靖一君と三人が出かける事になった。秋葉教授は出発直前に都合が生じて行けなくなられたので、けっきょく私と泉靖一君と二人で出かけた」[16]。

泉靖一の『遥かな山やま』(新潮社、1971 年)には鈴木榮太郎の名はでてこないが、秋葉隆の巫俗の調査方法とは違うものを鈴木榮太郎から学んだことであろう。その後、泉は大興安嶺のオロチョンを調査する。

「オロチョン族の調査を終って京城に帰ると、さっそく報告書をまとめてみた。いうまでもなく、秋葉先生の指導によるものである。先生は私の報告を聞いていて、やがて一枚の原稿用紙をわたされた。そこに、これから書こうとしている報告書の目次が書かれていた。それだけである。しかし、この一枚の原稿用紙をにらみながら、私なりに報告書を書きあげたときはうれしかった。写真帖をそえて秋葉先生に報告書を渡すと、気が晴ればれして、澄みきった秋の空のしたを走ってみた。いうまでもなく、この報告書が印刷されるとは夢にも思っていなかった。秋葉先生に読んでいただければ、それでよかったのである。

ところが、そこに、ほんとうの福の神がまいこんできた。故渋沢敬三さんが、多島海の調査ののち、同行の人びとともに京城にきて、私たちの研究室を訪ねてこられた。たしか、麻

の服に、白いパナマ帽をかぶっていたように記憶している。秋葉先生に紹介されたとき、渋沢敬三さんがなにものであるかを、私は知らなかった。〈ちょうど興安嶺から帰ってきたばかりで、報告書ができあがったところです〉といって、私の報告書を秋葉先生が渋沢さんに示した。渋沢さんは、百枚ばかりの原稿をひろい読み、写真帖をくっていたが、やがて、次のようにいわれたことを、生なましく記憶している。――これを『民族学研究』にのせましょう。そっくり、そのままがいい」[17]。

「大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告」が学会機関誌の『民族学研究』(第3巻第1号、1937(昭和12)年)に掲載されるのである。

「そのころの京城は、日本の末端であったので、自主的に物を考え評価する精神が、学者や知識人に欠けていた。したがって、すべて東京での評価が、するどく京城にはねかえってきていたのである。中央の学会誌に堂々と論文が掲載されたために、ぐうたら学生の典型とみられていた私に対する評価がしだいに変ってきた。そのことは、たしかに私の一生のうえで、大きな意味をもっていた。生れ変ったように勉強もし、調査にもでかけた」[18]。

京城帝国大学は、日本内地とは遠くへだたった周縁にある植民地に形成された大学であり、学問においても帝国のなかの後進性にあったことは否めない。しかし、泉靖一の渋沢敬三との出会いは、助手から講師、助教授になった先例はないという京城帝国大学どころか、東京大学に文化人類学学科の創設につながるのである。これは大英帝国の辺境からオックスブリッジの教授に就任した人類学者とも類似している。植民地のなかの帝国大学にはもうひとつ台北帝国大学があるが泉靖一と同様に戦後の人類学界の重鎮となる馬渕東一がいる[19]。そして、京都帝国大学の今西錦司博士を隊長とする白頭山遠征隊や大興安嶺調査隊から梅棹忠夫、富川盛道、和崎洋一という若い人類学者も同時代的に「辺境」の地で調査に従事していたのである。鈴木榮太郎にもどすが、泉靖一が鈴木から学んだことは、敗戦でフィールドを失った泉靖一が奈良県の十津川村とその分村である北海道の新十津川村でおこなった調査であるだろう。泉はこの調査で蒲生正男という人類学者を育てることになる。

5．鈴木榮太郎のフロンティア精神

鈴木榮太郎が、北海道大学法文学部に赴任したのは1947(昭和22)年である。鈴木は「北海道だより」のなかで次のように語っている。

「私は、北海道に来てまもなく病気に罹り、また研究上の関心がいちじるしく都市の研究に向っていったのではありますが、しかし、私が北大に来た一つの大きな理由は北海道の農村をよく調べてみたいためでありました。北海道の都市計画の景観や、家屋の様式やそれに

農家の農具や作物の品種等がアメリカによく似ている事は一般によく知られている事でありますが、北海道の農村の社会構造がアメリカのそれともっともよく似ている事は、内地の人にはあまり知られていないのではないかと思います」（村落社会研究会編『村落研究の成果と課題』1954（昭和 29）年、『鈴木榮太郎著作集Ⅲ　家族と民俗』未来社、1971 年、p. 323）。

鈴木榮太郎は、北海道という近代日本の国家形成のなかで創られた植民地の農村社会学原理を探求しようとする意図があったように思われる。つまり、日本内地の農村、朝鮮の農村、そして北海道の農村との比較という視点をとおして日本農村社会学原理を体系化しようという意図である。つまり、植民地支配の過程のなかで少数民族の後背地化と日本内地の殖民の定着化がどのように北海道の農村の集団編成過程をたどったのかを探求することである。しかし、鈴木榮太郎は大病に罹り農村の実態調査に従事することはできなかった。だが、札幌というかつての植民地都市を舞台に、都市とはどのように形成されるのかという峰が見えてきたはずである。つまり、都市社会学原理の探求である。塚本哲人は、『国民社会学原理ノート（遺稿）』の巻頭にも掲げられている和歌一首「学業の一つの峰を今越えぬ行手に見ゆる峰は数なし」を引用しながら、次のように回想している。

「昭和 32 年 12 月、暮れもおしつまってから、病魔と闘いながらの札幌 10 年の研究生活でものされた『都市社会学原理』初版第 1 刷が発行された。そしてその数冊が年内に博士の手元にとどいた。私事にわたって恐縮であるが、昭和 33 年の元旦、年賀に参上した筆者にもその一冊を恵与される折、右の一首を色紙にしたためられ、あわせて下されたのである。粉雪の舞う寒い日であったが、博士の書斎にはストーブが真っ赤に燃えていた。心のこもった豪勢な正月料理がならんだテーブルのまわりには、和洋の都市社会学研究書がうず高く積まれたままであったのが、今に印象鮮烈である」[20]。

『都市社会学原理』を上梓したときに鈴木榮太郎は、東京帝国大学及び京都帝国大学での主題でもあった国家社会学原理という峰々が見えてきたのではないか。それは「日本」という国家の統治機構と統治支配のメカニズムを探求しようとするものである。

ところで、鈴木榮太郎には、北海道大学文学部の弟子のなかでも、鈴木門下の双璧とされる笹森秀雄と富川盛道がいる。布施鉄治、藤木三千人とともに著作集を編集した弟子たちである。笹森秀雄は、都市の社会関係、住民組織、開発、住民運動などを研究対象とする鈴木榮太郎の都市社会学の後継者となった。もうひとりの弟子である富川盛道は、鈴木のフロンティア精神を継承する後継者である。

富川盛道は、1923（大正 12）年に沖縄に生まれた。母は琉球王朝の王族の系譜に連なるという。京都一中を卒業後、1948（昭和 23）年に大阪高等医学専門学校を卒業する。この期間、今西錦司博士を隊長とする大興安嶺探検隊に参加する。後のアフリカ学術調査の中核となる梅棹忠夫、

和崎洋一たちとの共同調査である。1948年に北海道大学法文学部哲学科実験心理学専攻に入学する。アイヌ調査のためであった。1952(昭和27)年、知里真志保博士のもとで、文学部アイヌ語アイヌ文学研究室の助手となり、1953年には鈴木榮太郎がいた社会学研究室の助手となった[21]。米山俊直とともに都市人類学の創始者となる日野舜也は、富川盛道との出会いを次のように語っている。

「映画少年くずれで行き先を失い、鈴木榮太郎先生のご好意で社会学に受け入れられたわたしが、生涯の師である富川さんに出会ったのは、56年の冬のことであった。深夜3時過ぎ、友人とふたりで飲み明かし、北大の脇を歩いているとき、たった一つあかりがついていた富川さんの助手室のドアをたたいたのが、最初の出会いだった。来週日高のアイヌのフィールドワークにゆくのだが、手伝いに来ないかと誘ってくれたのが、わたくしの一生をきめたのだった」[22]。

富川盛道は、アイヌ調査とともに今西錦司たちと遠野の共同調査を行っている[23]。また、鈴木榮太郎のもとでは都市社会学の調査も同時に進行していた。日野舜也は、その当時の都市調査の様子を次のように回想している。

「(富川さんは)社会学研究室の助手として、当時、『都市社会学原理』をご準備されていた鈴木榮太郎先生の、資料収集のためのフィールドワークを、笹森秀雄さん、布施鉄治さんなどとご一緒に精力的に行っていた。わたしも、その下っ端として、お風呂屋や映画館のまえで来客の住所調査をしたり、家々をまわって買い物先を尋ねたり、のちの都市調査の基礎をまなんだのであった」[24]。

これがどのような調査であったのかは鈴木榮太郎の『都市社会学原理』を読めばわかるだろう。富川盛道は、北海道大学文化人類学協会、北海道大学社会心理学研究会、アジア・アフリカ地域研究室などの共同研究会を発足させた。富川盛道・布施鉄治・日野舜也『都市人と映画』(北海道大学社会心理学研究会報告 No. 1)(札幌映画協会、1957年)、富川盛道・布施鉄治・日野舜也・富田浩造・和田正平[25]・和田耕一『都市人の映画行動とテレビ行動』(北海道大学社会心理学研究会報告 No. 2)(札幌映画協会、1960年)などを発表している。また、1960年の根訓原野雪上車調査隊は梅棹忠夫たち京都大学探検部との共同演習でもあった。その年に、今西錦司博士を隊長とする「京都大学アフリカ類人猿調査隊」が組織されて、富川盛道は人類班の班長としてアフリカに旅立つことになる。札幌が日本列島の新しい都市であったように、アフリカが独立をとげて新しい都市が誕生しようとしている時である。後に、京都大学アフリカ学術調査に参加した日野舜也、米山俊直が都市人類学を構想することになる。

富川盛道の「サバンナの木」というエッセイは次のような言葉ではじまる[26]。

山と山とはめぐりあわないが
人と人とはめぐりあう

これはタンザニアのダトーガ牧畜民のことばであるが、鈴木榮太郎にとって、壱岐、対馬、東京、京都、岐阜、京城、札幌、東京という足跡は、山との出会いであり、人との出会いであったように思われる。鈴木榮太郎は、「辺境」の位座から、社会学原理を構築することになった。

〔追記〕地名等については原則として鈴木榮太郎の執筆時の呼称にしたがっている。

【註】

1）鈴木榮太郎の年譜と業績については、三浦直子「鈴木栄太郎　1894-1966」川合隆男・竹村英樹編『近代日本社会学小伝―書誌的考察』(勁草書房、1998 年、pp.369-376)、眞鍋知子「鈴木栄太郎の学問的世界―『都市社会学原理』を中心として」(『奈良女子大学社会学論集』第 5 号(1998):182-192）が参考になる。

また、鈴木榮太郎と同じ壱岐出身の日高六郎の「鈴木先生のなかの壱岐」(『鈴木榮太郎著作集　第４巻　農村社会の研究　月報４』未来社、1970 年)によると、榮太郎は郷ノ浦町の旧家今西家に生まれ、同郷の山口麻太郎(柳田門下)とは毎年の年賀状を欠かさなかったという。壱岐には中学校がないので、対馬の厳原中学で学ぶが、厳原は当時船便の時間からいえば下関よりも釜山が近かった。牧野巽は「著者の朝鮮に関する知識や興味は朝鮮赴任前から恐らく一般の日本人とは異なっていたであろう」と述べている（「朝鮮の自然村を中心として」『鈴木榮太郎著作集Ｖ　朝鮮農村社会の研究』未来社、1973 年、p.501）。意味のある言葉である。

2）『日本社会学院年報』総目録(第 1 年～第 10 年)(1914(大正 3)年-1923(大正 12)年)については、川合隆男編『近代日本社会調査史(Ⅱ)』(慶應通信、1991 年)の「付録」を参照されたい。

3）岡正雄は、当時の東京帝国大学文学部の社会学科について「当時の先生方は建部教授、今井助教授、綿貫講師、小野講師などで、助手に赤神さん。先生方の講義は、率直にいっておもしろくなかった」と感想を述べている。続けて「私が社会学の方々と接触するようになったのは、卒業論文を書いてからのことだった。大正 13 年ではなかったかと思うが、先輩の蔵内、田辺、秋葉、鈴木君たちが中心となって、東京社会学研究会というものが発足し、私は先輩のどなたかから誘われてこのサークルに入れてもらった。(中略)　私はこの会の例会で、多分田辺さんにすすめられて、マリノフスキーの Argonauts of the Western Pacific の特にその kula 交換貿易エキスペディションの紹介報告をさせられたことを覚えている。従来の研究室の空気でこうしたテーマなど問題にならなかったと思う。この頃から従来の観念的社会学の傾向にあきたらず、実証主義的研究が台頭してきたのではないか、そしてこの新しい動向の温床が東京社会学研究会ではなかったかと考えられる」と述懐している(岡正雄「東京社会学研究会の

頃」『鈴木榮太郎著作集　第８巻　国民社会学原理ノート　月報７』(未来社、1975 年)。

竹内利美は、東北大学在任中に田辺寿利から東京社会学研究会創立の内幕話を聞きだしている。

「そのころの大学アカデミズムとしての社会学の在り方に大いなる憤懣を抱き、その沈滞を打ち破るべく、気鋭の士を糾合して、鮮新な研究方法をひろく導入しようということで、期せずしてそこでは新しい実証精神の昂揚という点が強調されたということであった。そして<蔵内がドイツ、鈴木がイギリス、アメリカ、そして自分はフランスという分担が、暗黙のうちに約束されたのだ>と、故田辺先生はよく冗談まじりにいわれ、博士がルプレー学派やアメリカ農村社会学の研究方法に学びながら、独自の視角による現地調査の実践を重ねて、「原理」の完成に到達した次第を、いつも引き合いに出して話に「落ち」をつけられたことを、蔵内博士の追憶にあわせて、筆者は思いおこすのである」(竹内利美「探求の道程―『日本農村社会学原理』の完成まで」『鈴木榮太郎著作集Ⅲ　家族と民俗』未来社、1971 年、p.341)。

4) 蔵内数太「若き時代の鈴木榮太郎」『鈴木榮太郎著作集　第 4 巻　農村社会の研究　月報 4』未来社、1970 年。

5) 鈴木榮太郎「柳田国男先生の思い出」『定本柳田国男集　月報』1963 年(『鈴木榮太郎著作集Ⅲ　家族と民俗』未来社、1971 年所収)。柳田国男が東京の牛込区加賀町の旧居から市外の砧村喜多見(現在の成城)に移ったのは 1927(昭和 2)年であるという(竹内利美「探求の道程―『日本農村社会学原理』の完成まで」『鈴木榮太郎著作集Ⅲ　家族と民俗』未来社、1971 年、p.343)。

6) 鈴木榮太郎「社会人類学上の研究としてのエンブリー氏の『スエ村』と日本農村社会学」(『鈴木榮太郎著作集Ⅲ 家族と民俗』未来社、1971 年所収)。鈴木榮太郎はエンブリーの須江村調査を援助している。なお、エンブリーはラドクリフ=ブラウンの愛弟子である。

7) 蔵内数太、前掲書、p. 2。

8) 鈴木榮太郎「わが国農村社会学の回顧と展望」(『喜多野博士記念論文集』1965 年)(『鈴木榮太郎著作集Ⅳ　農村社会の研究』未来社、1970 年所収)。

9) 富永健一「鈴木栄太郎の社会学理論」『現代社会学研究』(北海道社会学会)第 2 号、1989 年、pp. 1 -26。また、富永健一『戦後日本の社会学―一つの同時代学史』(東京大学出版会、2004 年)を参照されたい。

10) 伊藤亜人「秋葉隆―朝鮮の社会と民俗研究」綾部恒雄編『文化人類学群像　3　日本編』アカデミア出版会、1988 年。

11) 村武精一「末弟子からみた<秋葉隆>」『社会人類学年報』Vol. 3 (1977)、pp.182-183。

12) Bronislaw Malinowski, *Argonauts of the Western Pacific*, New York:E.P.Dutton & Company,Inc/London:Routledge & Kegan Paul Ltd,1922.また、泉靖一「マリノフスキーとレヴィ=ストロース―人間の科学としての文化人類学」(『世界の名著　59　マリノフスキー/レヴィ=ストロース』中央公論社、1967 年)を参照されたい。

13) 梅棹忠夫「泉靖一における山と探検」泉靖一『遥かな山やま』新潮社、1971 年。

14) 泉靖一『遥かな山やま』新潮社、1971 年、pp.79-80。

15) 大貫良夫「泉靖一―日本アンデス学の創始者」綾部恒雄編『文化人類学群像　3　日本編』アカデミ

ア出版会、1988 年。

16）鈴木榮太郎「朝鮮農村社会瞥見記」『民族学研究』第 1 巻第 1 号、1933 年(『鈴木榮太郎著作集Ⅴ　朝鮮農村社会の研究』未来社、1973 年所収)。

17）泉靖一『遥かな山やま』新潮社、1971 年、pp.107-108。

18）前掲書、p.108。

19）京城帝国大学(1924 年設立)と台北帝国大学(1928 年設立)については、白永瑞(趙慶喜訳)「想像のなかの差異、構造のなかの同一―京城帝国大学と台北帝国大学の比較からみる植民地近代性」(『現代思想』第 30 巻第 2 号、2002 年)を参照されたい。また、尹健次「植民地日本人の精神構造―「帝国意識」とは何か」(『思想』第 778 号、1989 年)は、朝鮮および満州に暮らした日本人植民者をとりあげて、その「帝国意識」を分析したものである。さらに、姜尚中「昭和の終焉と現代日本の「心象地理=歴史」」(『思想』第 786 号、1989 年)、安田敏朗『植民地のなかの「国語学」―時枝誠記と京城帝国大学をめぐって』(三元社、1998 年)、崔吉城「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」中生勝美編『植民地人類学の展望』(風響社、2000 年)、梶山季之『李朝残影―梶山季之朝鮮小説集』(川村湊編)(インパクト出版会、2002 年)、趙寛子「日中戦争期の「朝鮮学」と「古典復興」―植民地の「知」を問う」(『思想』第 947 号、2003 年)を参照されたい。

20）塚本哲人「鈴木社会学総体系化への指向―その壮絶な探求の意志」『鈴木榮太郎著作集Ⅷ　国民社会学原理ノート(遺稿)』未来社、1975 年、pp.389-390。

21）「富川盛道教授―年譜と業績」『アジア・アフリカ言語文化研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）第 31 号、1986 年、pp.182-186。

22）日野舜也「富川盛道博士のおしごと」『日本アフリカ学会会報』第 29 号、1998 年、p. 2。

23）柳田国男と今西錦司、貝塚茂樹、梅棹忠夫たち京都学派との関わりについては、鶴見太郎『民俗学の熱き日々―柳田国男とその後継者たち』(中央公論社、2004 年)を参照されたい。

24）日野舜也、前掲書、p. 2。

25）和田正平「富川盛道」『社会人類学年報』Vol.25、1999 年、pp.119-130。

26）富川盛道「サバンナの木―アフリカのある牧畜部族における生と死」『理想』452(1971):34-43。

（あくつ　しょうぞう　信州大学教育学部）